

Deep Dive Models in Agile (Part 2): Feature Trees

アジャイルにおけるディープ・ダイブ・モデル (パート 2) : フィーチャー・ツリー

筆者 : キャンデース・ホカンソン (Candase Hokanson) – 2016 年 9 月 22 日

翻訳 : 鈴木佑奈 PMP

適用領域 : アジャイル

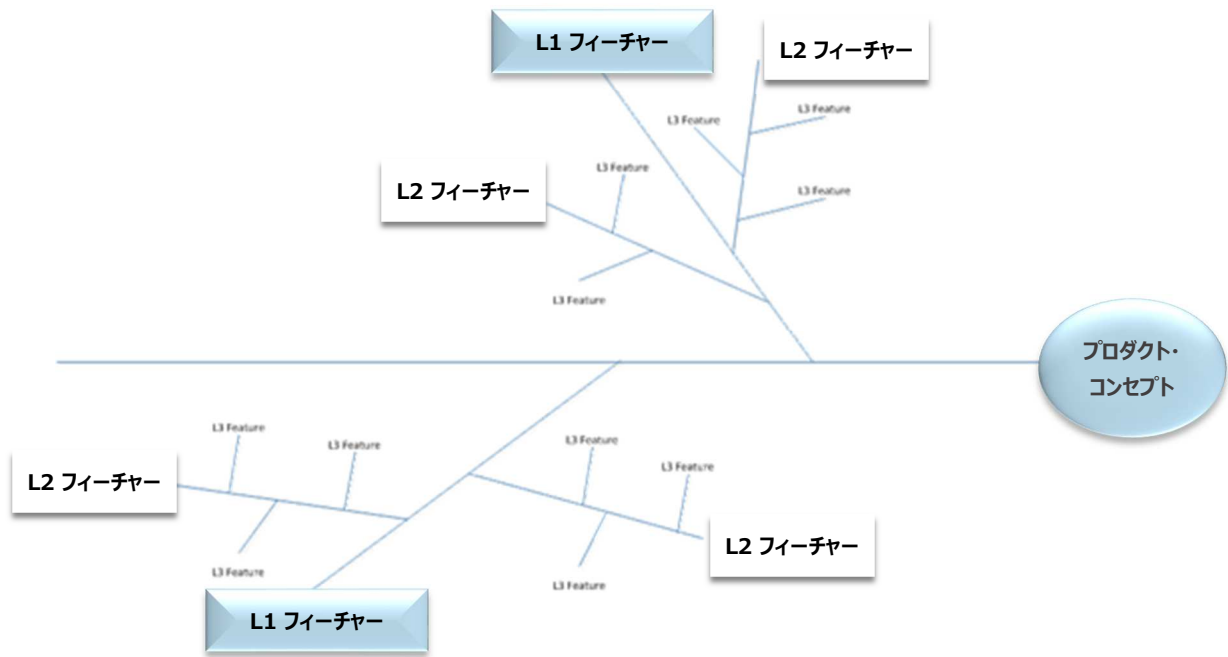
このシリーズでは、さらに良い実務慣行をプロジェクトに適用しようと考えているプロダクト・オーナー達に、価値のある情報を提供する。各回で、アジャイルにおいてよく使われている視覚的モデルの内 1 つを選び、どのようにそのモデルを作るのか、またどのようにそのモデルを使ってアジャイルプロジェクトにおいてバックログを組み立て、調整し、磨きをかけていくのか説明する。

初回の[プロセス・フロー](#)に続き、今回はフィーチャー・ツリーをみていく。(シリーズの他の回ではビジネス・データ・ダイアグラム、状態表/図、デシジョン・ツリー/テーブル、ビジネス目標モデルを扱う)

フィーチャー・ツリーとは？

フィーチャー・ツリーは、プロジェクトやプロダクトの全機能をツリー型で一枚のページに表した目標指向の要求仕様言語(requirements modeling language, RML)モデルである。フィーチャー(機能)は、エンド・ユーザーに価値をもたらすプロジェクトやプロダクトが提供する機能の簡潔な説明である。フィーチャー・ツリーは、新しいプロジェクト・メンバーに必要な情報を与える場合や、執行部、ビジネス・ステークホルダーや顧客にプロジェクトまたはリリース範囲内の全機能を示す場合に役立つ。

フィーチャー・ツリーは魚の骨図や特性要因図と形は似ているが、根本原因分析に代わって機能の階層を示している。フィーチャー・ツリーは、フィーチャー(機能)を論理的な固まりとしてグループ化して表すため、プロダクトの機能一覧を読むより容易に理解できる。しかし、フィーチャー・ツリーは、開示のために機能を視覚的に体系化するストーリー・マップや親和図に機能面でよく似ている。以下のフィーチャー・ツリーの例を参照。



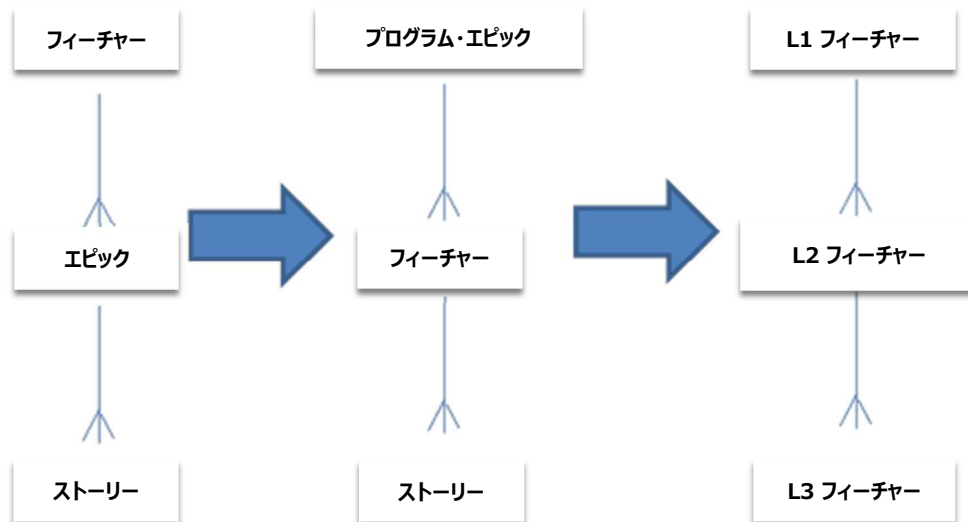
アジャイルプロジェクトにおいて、どのような時にフィーチャー・ツリーを使うのか？

フィーチャー・ツリーは、プロジェクトの情報を体系づけるために有用な手段なので、ほぼ全てのアジャイルプロジェクトで使える。プロダクト・オーナー（PO）やビジネス・アナリスト（BA）は通常、スプリント 0 や計画フェーズのタイミングでプロジェクト憲章や軽微なビジネス・ケースの情報を参考にしながらフィーチャー・ツリーを使い始める。

そこから、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストはフィーチャー（機能）をグループ化し、L1、L2 と L3 の関係性を把握し、見落としているフィーチャー（機能）がないか確認する。プロジェクトで使用している階層構造によるが、おおよそ以下のように使う。

プログラム・エピック -> フィーチャー -> ストーリーもしくは単一のフィーチャー -> エピック->ストーリー

L1、L2、L3 のフィーチャー（機能）において、ストーリーの階層を作るかは任意である(下図参照)。



スプリント 0 や計画フェーズにおいて、完全なスコープを把握することは難しいため、フィーチャー・ツリーは一般的に、徐々に展開されていく。さらに、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストが新しいフィーチャー(機能)をバックログに足していくため、開発行程全体を通してフィーチャー・ツリーは展開されていく。フィーチャー・ツリーは、どのように各事象が関連しているのか視覚的に把握しやすくしてくれるため、バックログの階層をまとめる際にも使うことができる。

フィーチャー・ツリーは下記の点から、アジャイルプロジェクトで特に有効なモデルである。

- カラー・コーディング:** プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストは、リリースまたはスプリント・反復でフィーチャー(機能)を色分けすることができる。それは、特定のフィーチャー(機能)がリリースのスコープに含まれるのかそうでないのかを一目でわかりやすくする。
- 位置による優先順位付け:** プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストは、より重要なアイテムをツリーの「幹」に近づけることでフィーチャー・ツリーを順序づけることができ、バックログの優先順位を可視化することができる。
- ギャップ分析や現状・将来の状態把握:** リリースでカラー・コーディングする代わりに、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストはシステムのギャップや現状と将来の状態によって色分けすることができる(赤、青、緑による色分けやスキットルと呼ばれる色付けされた小さな円による判別)

どのようにフィーチャー・ツリーを作るのか？

プロセス・フローのように、フィーチャー・ツリーは引き出しやすく、構築しやすい要求仕様言語モデルの 1 つである。まず始めに、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストはビジョンやスコープ定義書もしくはプロジェクト憲章からプロジェクトやプロダクトの既存の機能一覧があるか見つけ出すべきである。

そこから、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストは潜在的なフィーチャー(機能)を見つけて出すため、さらには親和図やストーリー・マップにおいて潜在的なフィーチャー(機能)をグループ化するためにブレーン・ストーミングを主催する。その後、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストはフィーチャー(機能)のフォーマットを決めなければならない。この記事は

情報をまとめるために便利な手段であるフィーチャー・ツリーについて扱っているが、2 階層のストーリー・マップや親和図は同様の情報の大部分を伝えるであろう(ストラクチャーによってはバックログには紐づけられないかもしれないが)。

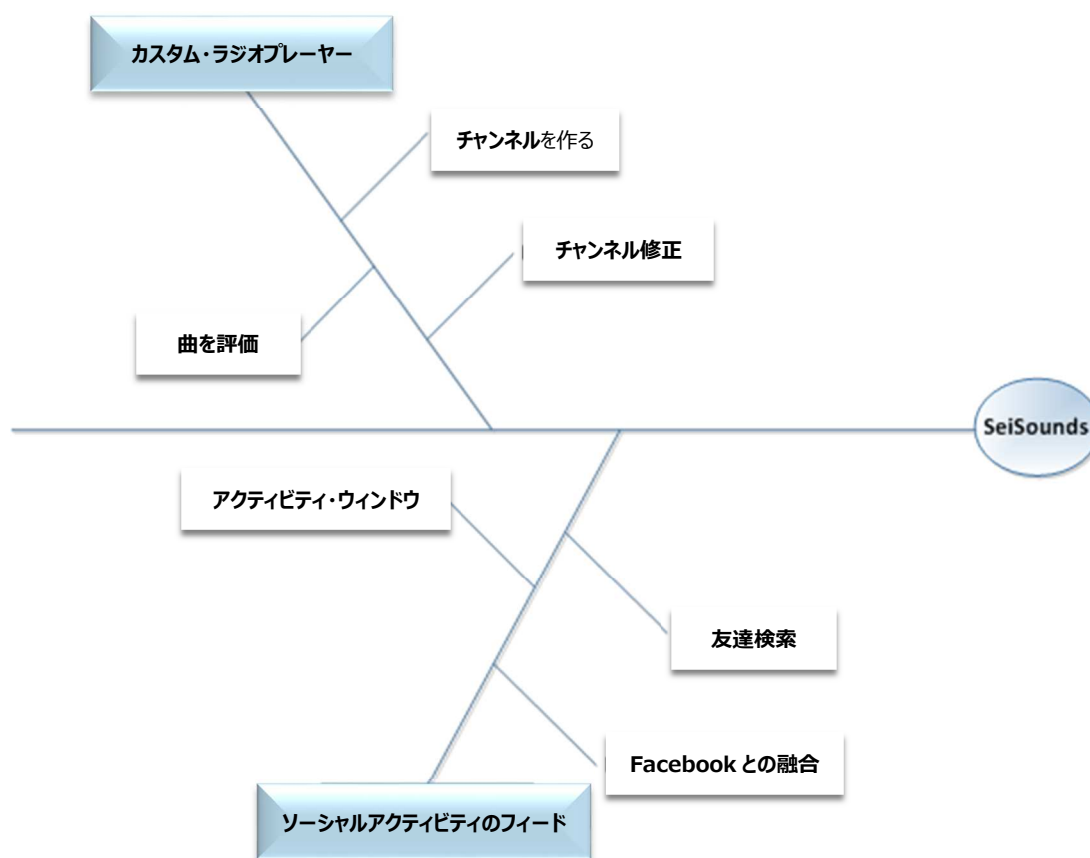
プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストがフォーマットを決めてしまえば、モデル自身は単純な 2 つの要素になる。

1. **幹/プロダクト・コンセプト:** フィーチャー・ツリーの幹部分にはプロダクト・コンセプトがくる。これは、どのようなプロダクトもしくはプロジェクトかを表す端的な文章である。プロダクト・コンセプトは、このシリーズの次の記事で議論されるビジネス目標モデルに由来している。
2. **枝/フィーチャー(機能):** 幹から出た枝は、実物の木の枝のように複数の階層をもつ。一番大きな枝は L1 のフィーチャー(機能)である。L1 フィーチャー(機能)は、プロダクト・コンセプトのようにビジネス目標モデルからハイレベルに説明される。これら L1 フィーチャー(機能)はストーリーの階層に応じて、さらに L2 と L3(小さな枝)に細分化される。

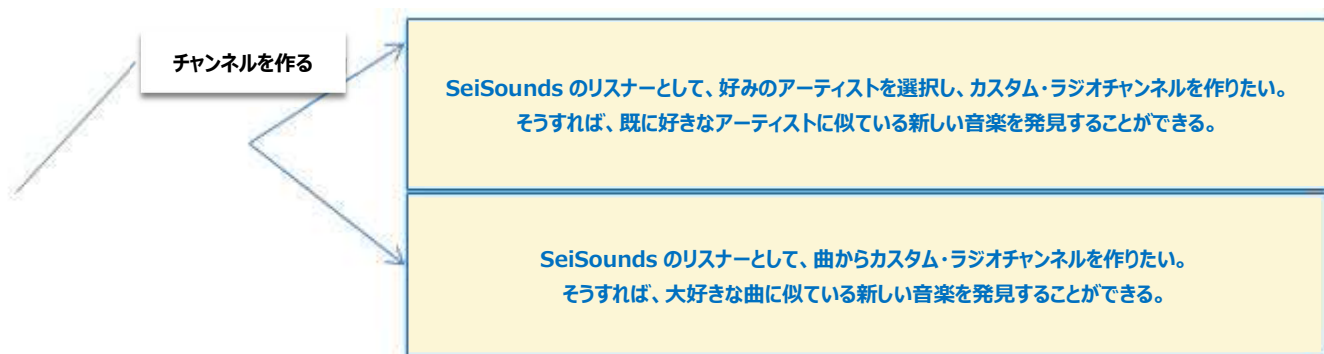
どのようにフィーチャー・ツリーからユーザー・ストーリーを導き出すのか？

プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストがフィーチャー・ツリーの草案を作成すると、エピックやフィーチャー(機能)はそこから除外される。(再度のことだが、プロジェクトやプロダクトの階層構造に依存する。)

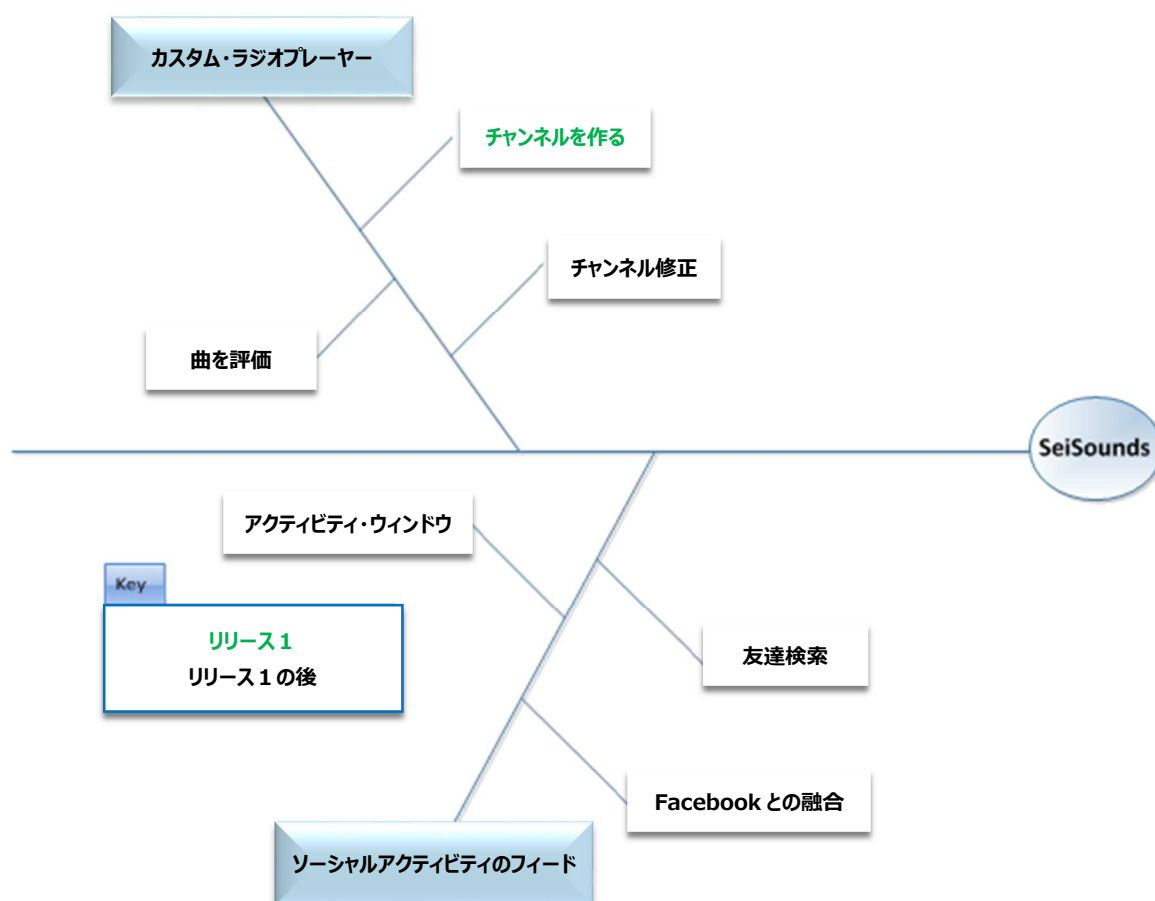
L2 や L3 の各枝がエピック・フィーチャーまたはストーリー・フィーチャーになり、L1 の各枝がプログラム・エピックやプログラム・フィーチャーとなる(SAFe や一般的なアジャイルの階層に基づく)。以下のフィーチャー・ツリーの例を参照。



下図にある「ラジオチャンネルをつくる」というフィーチャー(機能)は、バックログ内の後続のエピックやフィーチャー(機能)になることがある。



さらに、先に述べたようにカラー・コーディングを足すことで下図のようにリリースやスプリントを示すことができる。



結論

プロセス・フローのようにフィーチャー・ツリーは、アジャイルプロジェクトで使用でき、フィーチャー(機能)、エピックやユーザ・ストーリーを引き出すことができるとも簡単な要求仕様言語モデルである。なぜなら、フィーチャー・ツリーは、プロジェクトやプロダクトのスコープを一枚のページにまとめることができるからだ。

執行部、ビジネス・ステークホルダーや顧客は、何がスコープに含まれていて、何が含まれていないかがわかりやすい、この視覚的モデルを好んでいる。また、彼らにいつ特定のフィーチャー(機能)を提供できるのかまでも潜在的に示すことができる。開発者や試験実施者にとっては、特定のユーザ・ストーリーに取り組んでもプロジェクトの全体像を見せてくれるフィーチャー・ツリーを好む。

最後に、プロダクト・オーナーとビジネス・アナリストは、プロジェクト初期におけるバックログの集団、さらにプロジェクト全体におけるバックログの維持にこのモデルが役立つと認識している。そのため、フィーチャー・ツリーはアジャイルプロジェクトにおいて(プロセス・フローに次いで)よく使われている要求仕様言語モデルの1つであるのだ。

ひとつ留意点をあげるのであれば、このモデルはフィーチャー・ツリー(ひいてはバックログ)に追加機能やスコープを追加することが容易すぎることである。そのため、プロダクト・オーナーやビジネス・アナリストは自分のプロジェクトにとって本当に必要なフィーチャー(機能)のみ構築されるよう、用心深くバックログをマネジメントしなければならない。

読者の評価: 平均 6.75 (7点満点)



①

②

③

④

⑤

⑥

⑦



キャンデースは Seilevel 社のシニア・プロダクト・マネジャーおよび PMI アジャイル認定実務者である。さらに、プロダクト・オーナー、スクラムマスター、ビジネス・アナリストらにアジャイルアプローチしてクライアントにとって素晴らしいプロダクト提供について訓練およびコーチングを行っている。